

第221回 令和8年4月30日（木）

「もし他人の心が読めてしまったら」

小さいころに読んだ怪談で「さとり」という妖怪がでてきました。

ある山の中で若者が小柄の老人と出会います。若者は「気味が悪いな」と心の中で思ったら「いま気味が悪いと思っただろう」と、心の中を言い当てられてしまいます。

このようなやりとりが何度か続く物語だったと思います。

それだけ昔の人は「心の中」を覗かれることに恐怖感があったのだと思います。心の中で何を考えたとしても、口に出したり行動に移したりしなければそれは自由です。でも心の中を見られてしまうのは誰だって嫌だと思います。

反対に心の中が見えてしまう「さとり」はどうなのでしょう。私は嫌だと思います。他人は瞬間的に心の中でこちらが想像できないことを思っている可能性があります。もしそれがすべて見えてしまうとしたら、きっと人間として耐えられるものではありません。

言った人が特定できなかつたとしても、人の心の中の本音は思った以上にドロドロしているものかもしれません。「さとり」の能力が欲しいと思いませんし、むしろ鈍感であることのほうが幸せなのかもしれないと思います。

SNSは世界の人々を「さとり」にしてしまいました。何か事件が記事になると、誰もが一斉に心の中をさらけだします。きたない言葉や誹謗中傷もあります。見たくなくても目に入っています。

親しい友達とSNSで会話をしている、それが声に出して言った言葉か、心の中の言葉かSNS上ではわかりません。もし3人のグループで、2人のグループと勘違いしてもう一人の話題を話してしまったら…。本来は聞かざるの会話が見えたとき、人間の心は簡単に壊れてしまうのではないのでしょうか。

見なくて良いものは見ないほうが良いし、知らなくても良いことを知る必要はありません。小さいころからSNSにさらされた若者の心が病んでしまうのも当然です。この先もっと心を病む人間が増えていくのではないのでしょうか。

オーストラリアなどで16歳以下のSNSが禁止されています。見ることを完全に禁止するのは難しいとしても、一定の効果はあると思います。人の心は一度壊れてしまうと治すためには長い時間がかかります。日本でもこのような施策は検討すべきではないかと思います。